

大学生の体験活動の現状と課題
A need of experience in university students

松永由弥子・塚本博之・岩崎功

Yumiko MATSUNAGA ・Hiroyuki TSUKAMOTO ・Isao IWASAKI

(平成23年10月4日受理)

要旨

本研究は、人間形成における体験活動の意義を検討した上で、大学生の体験活動の意義および現状と課題を明らかにしようとするものである。

はじめに、昨今のわが国の教育界における体験活動のとらえかたを整理し、小学校・中学校・高等学校の学校教育の中でも体験活動が重視されている傾向にあることを明らかにした。全国的な調査研究から、これまで経験的に言われてきた体験活動のよさが実証され、特に道徳的・精神的な成長を促すためには、体験活動が有意義であることが明らかとなったからである。

次に、大学教育においては、社会の要請に応えた社会人・教員の育成の観点から、体験活動が有用であることを考察した。本学部の学生の実態からも体験活動が意義あるものであることを明らかにした。道徳的・精神的な成長は、社会人となる大学生にも「社会人基礎力」等の呼び方で期待されるものであり、大学教育においても体験活動が重要かつ必要である根拠ととらえることができた。また、教員を養成する教職課程教育においても、将来高い生徒指導力や実践的指導力を備えた教員になるために、学生時代にはその基礎となる体験活動をより多く行うことが望ましいと考えられている。

最後に、本学部の学生の現状やこれまで行われてきた体験活動であるキャンプ実習の成果等を考察したところ、学生が、体験活動を自分にとってプラスの活動であるととらえ、自身の成長を実感していること、特に自然体験活動は体験活動の幅を広げるのもであると、体験活動やキャンプ実習のようなプログラムを肯定的に受け止めていることが示された。

したがって、本学部において、今後も、大学生の日頃の活動の中で不足しがちな自然体験、野外活動の提供を重視し、キャンプ実習のような活動の充実を図ることは重要であると考えられる。

1. はじめに

本研究は、人間形成における体験活動の意義を検討した上で、大学生の体験活動の意義および現状と課題を明らかにしようとするものである。

世の中を見ても、本業に精を出す一方、趣味・道楽を楽しむなど生活体験や社会体験が多い人ほど、生き生きとした人生を送っているように見受けられる。すなわち、「生」の体験の豊富さが豊かな想像力を培い、それが充実した人生に繋がると考えられるのである。とりわけ、将来社会人となる大学生には、学生時代の今から、趣味活動やスポーツ活動、ボランティア活動等を通し、様々な体験を積み、自分の人生を充実した生きがいのあるものにして欲しいと考える。社会人になってからでは、時間に制限を受け、余程のきっかけがないと体験活動をしようとする最初の一步を踏み出すことができないからである。

本稿では、まずはじめに、昨今のわが国の教育界における体験活動のとらえかたを整

理し、小学校・中学校・高等学校の学校教育の中でも体験活動が重視されている傾向にあることを明らかにする。次に、大学教育においては、社会の要請に応えた社会人・教員の育成の観点から、体験活動が有用であることを考察し、本学部の学生の実態からも体験活動が意義あるものであることを明らかにする。最後に、本学部でこれまで行われてきた体験活動としてキャンプ実習を取り上げ、その成果を考察し、今後の本学部における体験活動の提供の在り方を提示したいと考える。

2. わが国の教育界における体験活動の位置づけ

(1) 実証された体験活動の意義

日頃から「百聞は一見に如かず」ということわざもあるように、体験することの大切さは一般的に説かれている。

近年、特に青少年の成長・発達における体験活動の有用性については、国立青少年教育振興機構の実施した調査研究において指摘されている¹⁾。この調査は、平成 21 年に 20～60 歳代の成人 5,000 人と小学校高学年～高校生までの青少年約 11,000 人を対象に、子どもの頃の体験や身についている意識や能力(調査では「体験の力」と総称)について尋ねる内容で行われた。その結果、子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多く、(日本)文化的作法・教養が高く、最終学歴や現在の年収が高い傾向にあることが示されている。また、高校生においても、高校入学にいたるまでの体験が多いほど、思いやり、やる気、人間関係等の資質・能力が高い傾向にあることが明らかにされた。これらの調査結果は「人間形成において経験は大切である」という表現や、先にも述べたようなことわざのように、広く社会で言われる体験の重要性を実証するものとして注目すべきものであろう。

(2) 体験活動に関する教育法令

少子化、都市化の進展や生活の便利さなどにより、子どもたちの生活体験の乏しさがいわれて久しい。この生活体験の不足が人間関係の希薄化や規範意識の低下などをもたらし、子どもたちの様々な問題行動の要因ともいわれている。これらのことから、中央教育審議会答申等においても体験的な活動の重要性が指摘され、さらに上記のように体験活動の意義が実証的に明らかになる中で、国や都道府県において積極的に子どもの体験活動の充実を図る施策が展開されようとしている。施策展開の根拠となる体験活動に関する教育法規や学習指導要領等をまとめると、次のようになる。

① 学校教育法

i 第 21 条〔教育の目標〕

義務教育として行われる普通教育は、教育基本法（平成 18 年法律第 120 号）第 5 条第 2 項に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するように行われるものとする。

- 一 学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

二 学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度をやしなうこと。

三～十 省略

ii 第 31 条〔体験活動〕

小学校においては、前条第 1 項の規定による目標の達成に資するよう、教育指導を行うに当たり、児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする。この場合において、社会教育関係団体その他の関係団体及び関係機関との連携に十分配慮しなければならない。

（第 49 条、第 62 条で、中学校、高等学校に準用）

② 小学校学習指導要領（平成 20 年 3 月告示）

第 1 章 総則 第 1 款 教育課程編成の一般方針

2 学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏（い）敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓（ひら）く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、児童が自己の生き方についての考えを深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。その際、特に児童が基本的な生活習慣、社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすることなどに配慮しなければならない。

③ 中学校学習指導要領（平成 20 年 3 月告示）

第 1 章 総則 第 1 款 教育課程編成の一般方針

2 学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏（い）敬の念を家庭、学校、その他社会における

具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓(ひら)く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

道徳教育を進めるに当たっては、教師と生徒及び生徒相互の人間関係を深めるとともに、生徒が道徳的価値に基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。その際、特に生徒が自他の生命を尊重し、規律ある生活ができ、自分の将来を考え、法やきまりの意義の理解を深め、主体的に社会の形成に参画し、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けるようにすることなどに配慮しなければならない。

④ 高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）

i 第 1 章 総則 第 1 款 教育課程編成の一般方針

4 学校においては、地域や学校の実態等に応じて、就業やボランティアにかかわる体験的な学習の指導を適切に行うようにし、勤労の尊さや創造することの喜びを体得させ、望ましい勤労観、職業観の育成や社会奉仕の精神の涵養に資するものとする。

ii 第 5 章 特別活動 第 2 各活動・学校行事の目標及び内容〔学校行事〕

2 内容

全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。

iii 第 5 章 特別活動 第 3 指導計画の作成と内容の取扱い 2（3）

〔学校行事〕については、学校や地域及び生徒の実態に応じて、各種類ごとに、行事及びその内容を重点化するとともに、入学から卒業までを見通して、行事間の関連や統合を図るなど精選して実施すること。また、実施に当たっては、幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合い、自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること。

⑤ 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成 20 年 1 月 17 日）

i ……。しかし、家庭や地域の教育力が低下し、生活習慣の確立が不十分、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流の場や自然体験の減少などが生じる中で、学校教育は、道徳教育や体育に関する指導を充実させるとともに、体験活動については学校教育の中でそのきっかけ

づくりを行い、家庭や地域との新たな連携へとつなげていく必要がある。

（４．課題の背景・原因 （２）学習指導要領の理念を実現するための具体的な手立て）

- ii ……第三は、自分に自信がもてず、自らの将来や人間関係に不安を抱えているといった子どもたちの現状を踏まえると、コミュニケーションや感性・情緒、知的活動の基盤である国語をはじめとした言語能力の重視や体験活動の充実を図ることにより、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信をもたせる必要があることである。

（５．学習指導要領改訂の基本的な考え方（２）「生きる力」という理念の共有）

- iii ……、自然の中での集団宿泊活動や職場体験活動、奉仕体験活動などの体験活動は、他者、社会、自然・環境との直接的なかかわりという点で極めて重要である。体験活動の実施については、家庭や地域の果たす役割が大きく、学校ですべてを提供することはできないが、家庭や地域の教育力の低下を踏まえ、きっかけづくりとしての体験活動を充実する必要がある。

（５．学習指導要領改訂の基本的な考え方（７）豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実）

また、中央教育審議会は、ここでも取り上げた新学習指導要領の趣旨を発展させるためには、子どもたちの体験活動の一層の充実を図る機運をつくる必要があるとし、スポーツ・青少年分科会の中に「青少年の体験活動の推進の在り方に関する部会」を新設した²⁾。今後、文部科学省はこの部会での報告書を受け、「体験活動推進法」の制定を目指している。

これらのことから、現在の日本の教育界において、体験活動の意義が認識され、その充実を図る施策展開が模索されていることがわかる。

3. 大学生にとっての体験活動の意義

（１）大学教育の目的と社会からの要請

高等学校までの学校教育においては体験活動が重視される傾向を明らかにしたが、次に大学教育では、どのような動向にあるかを考察してみよう。

大学の設置根拠となる教育法令は、次に挙げる教育基本法、学校教育法、大学設置基準である。

① 教育基本法 （大学）第 7 条

大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を養うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

- ii 大学については、自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない。

② 学校教育法 第 83 条

大学は、学術の中心として、広く知識を受けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

- ii 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

③ 大学設置基準（教育研究上の目的）第2条

大学は、学部、学科又は課程ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定めるものとする。

これらの法令には、大学は、高等教育機関としての専門教育や研究活動が大学設置の主たる意義であることが述べられている。その中に、社会の発展への寄与、道徳的能力の育成、人材の養成が含まれているととらえられる。このことを「社会の発展寄与の一方法として、専門的・知的能力とともに道徳的・応用的能力を備えた人材を養成する」こととして、大学教育の目的と考えることもできるであろう。

このような大学教育の目的を達成するにあたっては、高等学校までのような学習指導要領は存在せず、各大学が自主的・自律的に教育課程を編成するのであるが、その際に、体験活動は意義あるものと考えられる。それは、2(1)でみたように、体験活動が規範意識や人間関係能力等の道徳的能力の育成に影響を与えるからである。

加えて、大学教育の在り方や教育課程を検討する際には、社会の求める人材像が影響を持つと考えられる。現在の日本では、大学進学率が高くなり、社会に出る一手手前の最終学校として、すなわち社会人の最終養成機関として「大学」が位置づけられることが多くなったからである。

最近では、社会の求める人材像を、具体的に社会の一員として生活する者が、それまでに身につけておくべきとされる能力として提唱される場合が多い。例えば、文部科学省のキャリア教育の観点からの「基礎的・汎用的能力」、経済産業省の「社会人基礎力」、内閣府の「人間力」、厚生労働省の「就職基礎能力」等である。それらの中で、文部科学省では、キャリア教育を「一人一人の社会的・経済的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、キャリア教育によって育むべき能力として「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つからなる「基礎的・汎用的能力」を提示している³⁾。また、経済産業省では、「職場や地域社会で多様な人々と仕事していくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」と定義し、それは「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」で構成されるとしている⁴⁾。さらに具体的には、「前に踏み出す力」は「主体性」「実行力」「働きかけ力」の3つの能力要素、「考え抜く力」は「計画力」「課題発見力」「創造力」の3つの能力要素、「チームで働く力」は「発信力」「柔軟性」「情報把握力」「傾聴力」「規律性」「ストレスコントロール力」の6つの能力要素で構成されると定義している。職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力は、この社会人基礎力に加え、「人間性、基礎的な生活習慣」も挙げられている。このような形で提唱される能力は、大学教育においての育成が期待されており、大学の教育課程編成においても配慮する必要があると考えられる。

その中で、例えば文部科学省の示す基礎的・汎用的能力の「人間関係形成・社会形成能

力」や、経済産業省の示す社会人基礎力の「主体性」「規律性」あるいは「人間性・基礎的な生活習慣」は、前述 2(1)の国立青少年教育振興機構の調査結果を根拠に、体験活動型・実習型の授業によって、より効果的に学生に習得させることが期待できるであろう。したがって、大学教育においても、学生の体験活動は非常に意義のあるものと思われる。

(2) 教職課程教育の観点から

本学部には、高校「情報」科教員を養成する教職課程が設置されているが、教員としての資質養成においても、体験活動は重要なものと考えられる。実際、教職課程を履修している教員志望の学生には、インターンシップやアルバイトなどの経験だけでなく、登山、スキー、キャンプ、ボランティアなど野外活動を含めた体験を数多く積むように働きかけている。その主な理由は二つある。一つは、豊富な実体験が、教員になってからの生徒指導力の基礎と考えられるからである。また、もう一つは、最近、小・中・高等学校においては体験活動の重要性が益々強調され、教師にもその指導力が求められるようになっているからである。

① 実体験を通じた実践的指導力・生徒指導力の基礎の養成

教師の資質能力については、「いつの時代も求められる教員の資質能力」として、1997年の文部省（現、文部科学省）の教育職員養成審議会第1次答申で次のように指摘されている。それは、i 教育者としての使命感、ii 人間の成長発達についての深い理解、iii 幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、iv 教科等に関する専門的知識、v 広く豊かな教養、vi これらを基盤とする実践的指導力、の6点である。当然、これらの項目は互いに関連し合っている。「教育者としての使命感」がなければ、「生徒に対する教育的愛情」に溢れた指導を行うことはできないだろうし、また、「教科等に関する専門的知識」を深める自主研修を地道に持続的に行うことはできないであろう。また、「教科等に関する専門的知識」についてみれば、教科別の授業を毎時間成立させるためには、教師が教科の専門的知識を知識として持っているだけでは不十分で、40人前後の生徒で構成される学習集団をコントロールし、知識・技術の習得に導くことができる「実践的指導力」が必要不可欠となるであろう。教科の知識・技術が十分あれば、生徒に知識を伝達することは可能であるが、学校での主な教授方法は授業のような集団活動であり、この集団活動を行うにあたっては、教科の知識・技術とは異なる、個人として或いは集団として生徒をコントロールする力が必要となる。この力を教育界では生徒指導力と呼んでいる。「これらを基盤とする実践的指導力」とは、生徒指導力の上に成り立つものであることを示している。

本学部の教職課程では、平成23年度入学生の場合、表1に示すような教職に関する科目を設定し、学生がこれら6項目の資質能力を身に付け、伸ばすことを目指している。表1の教職の関する科目と情報に関する専門科目の授業を受ければ、情報の教師としての資質能力について、i から v を理論的には学習することになる。ところが、vi の実践的指導力は、座学中心の講義式の授業だけで身につけることは難しい。

教師の実践的指導力の養成に関するデータがある。教育新聞『『教師力』を探る』の調査結果（平成23年7月4日、小・中・高の教員505人が回答）によると、「教員としての実践的指導力がいつ頃身についたか」という質問に関する回答では、「大学在学中、あるいは

はそれ以前」が0.2%、「教員になりたてのころ」が4.2%、「教員になって数年後」が38.7%、「教員になってから10年以上たってから」が49.3%、「まだあまり身につけていない」と「なんと答えにくい」が合わせて7.5%となっている⁵⁾。ここから教師の実践的指導力の育成には長い教職経験が必要であることがわかる。大学卒業時点で実践的指導力がある者と答えた人は、100人に1人もいないのである。つまり、学生時代には、実践的指導力を身に付けることはできないといってもいい。

では、本学部の教職課程の学生は、学生時代に何を学ぶべきなのか？それは、将来優れた実践的指導力やその前提となる生徒指導力を有することができるよう、それらの基礎となる部分を培うことである。学生時代に十分な実践的指導力は身につかないのだからと座学中心の教職に関する理論的な学習だけでなく、将来生徒に正面から向き合い良好な関係を築けるように人間関係能力を磨いたり、授業が学習指導案通りに進まないような困難(課題)を乗り越えるための課題解決能力を身につけたりと、実践的指導力の基礎になるべき能力を、主に様々な体験の中で身につける必要があると考えられる。このような能力は、先にも述べたように、体験によって習得されるものである。具体的には、大学での部活動やサークル活動に励むことや、スポーツや囲碁・将棋などの趣味に没頭したり、ボランティア活動に参加したりするなど、自然体験や社会体験など様々な実経験を積むことが有意義であろう。また、それらの体験から得られるスキルが、次に述べる特別活動の指導にも生かされることになる。

表1 教職に関する科目

教 職 に 関 する 科 目	1年次	2年次	3年次	4年次
	○ 教職入門(教師論)	○ 教育心理学(発達と学習)	○ 情報教育法I	情報教育法II
	○ 教育原理	○ 教育と社会	○ 教育方法・技術	○ 教育実習I
		○ 教育課程と方法	○ 生徒指導	○ 教職実践演習(高校)
		○ 特別活動	○ 教育相談	
		○ 進路指導	○ 事前事後指導(3)	

② 高校の特別活動における指導力の向上

教師には教科の学習指導のほかに、部活動や生徒会活動、またときにはボランティアやキャンプにおける指導など、体験的な活動の場における指導もできなければならない。このような高校における部活動以外の体験活動は、主に特別活動として行われることが多い。

例えば、静岡県多くの公立高等学校では、1年時に集団宿泊活動、2年時に修学旅行など、大規模な学校行事が計画されている。特に、集団宿泊活動では、利用する施設の設備状況にもよるが、一般的には自炊活動も予定に組まれている。この場合には、米を研いで火を熾し、釜戸で米を炊く。まき割りの作業が組み込まれていることもある。この原始的な作業が生徒たちにとっては貴重な生活体験となる。(これが静岡県高校生山の村の設置理由の一つである。)施設によっては施設側の担当者が指導してくれるが、生徒集団の規模が大きくなれば、学級担任も自炊指導等の一端を担わなければならない。小学校、中学校のとき似たような体験を積んでいても、日常家電製品の恩恵に浸っている高校生には、薪で米を炊くことは難しい。学校で行われるこのような体験的な活動は、地震などの災害時

に生き延びるスキルとしてだけでなく、知的な学習活動とともに人間形成に不可欠な教育活動と考えられ、各学校の教育課程に「特別活動」として位置付けられている。

この他に高等学校で行われる特別活動としては、入学式、卒業式、始業式、終業式など儀式的なものや、遠足、運動会、合唱コンクールなど文化・体育的な行事もある。また、修学旅行や集団宿泊活動、週 1 時間行われるホームルームも特別活動の一つである。学習指導要領に定められた特別活動の目標は、「望ましい集団生活を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」となっている。つまり、集団活動や体験的な活動を通して、生徒の自主的・実践的な態度を養い、社会性や自己教育力の育成を目指すところにある。そして、「なすことによって学ぶ」という具体的な体験活動が、その基本的な内容となっている。

この高等学校で行われる「特別活動」の内容や指導の方法について学ぶ教職課程の授業科目が、表 1 の教職に関する科目として 2 年次に履修する「特別活動」という名の授業である。この授業では、「特別活動」についての理論を学ぶのが主であって、その内容である体験活動を実技として学ぶことは少ない。そのため、教職課程の学生には、将来の「特別活動」の指導のために、ボランティア活動や自然体験活動などの体験活動に、自主的・積極的に参加するよう指導している。その一環として、本学部の授業科目「アウトドアスポーツ D (キャンプ)」、「アウトドアスポーツ E (スノーボード)」の少なくとも一つは履修するよう薦めている。

(3) 本学部生の体験活動等の現状～アンケート調査結果より～

実際に、現在の大学生にとって体験活動がどのような意義を有するかについては、本学部生を対象に行った体験活動に関するアンケート調査の結果から考察してみよう。このアンケート調査は、平成 23 年 8 月に「数学」または「文化と教育」を受講している学生に対して、巻末の資料のような調査票を用いて実施した。具体的には、キャンプのような自然体験の有無と体験した場合の感想、キャンプのような自然体験の意義、そのほかの自然体験の有無、日頃の生活での活動内容、性別・年齢等の属性についてたずねた。その結果、18 歳～27 歳の男性 105 名、女性 24 名、合計 129 名から回答を得ることができた(表 2)。

表 2 回答者の性別・年齢別内訳

	男	女	計
18歳	22	3	25
19歳	14	3	17
20歳	32	12	44
21歳	30	5	35
22歳	4	0	4
23歳	2	1	3
27歳	1	0	1
	105	24	129

①大学生にとってのキャンプ経験の意義

今回の調査回答者の8割以上が何らかの形でキャンプのような自然体験(以下、キャンプ経験と略)をしたことがあると答えた(表3及び図1)。男性の場合には、自分たちで体験したことのある者も男性のキャンプ経験者の4割弱を占めた。

表3 キャンプ体験の有無

	男	女	計
学校	54	17	71
自分で体験	34	3	37
体験なし	17	4	21
合 計	105	24	129

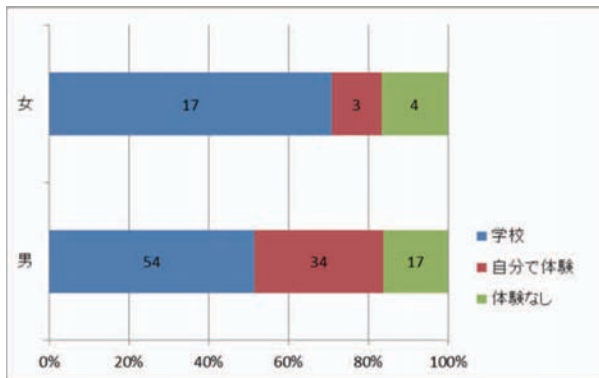


図1 性別にみたキャンプ体験の有無

次にキャンプ経験者に対しては、キャンプ経験を通して感じたことを挙げてもらったところ、総じて肯定的な感想が多く、男女とも「協力してできた」「自然を満喫できた」「いつも体験できないことができた」と答える割合が高かった(表4)。特に女性では「協力してできた」「自然を満喫できた」を挙げる割合が8割以上であった。

表4 キャンプ体験で感じたこと(カッコ内の数値は男女別人数に対する割合)

	男	女	計
友だちができた	30 (34.1)	7 (35.0)	37
リーダーシップをとれた	10 (11.4)	5 (25.0)	15
協力してできた	59 (67.0)	16 (80.0)	75
自然を満喫できた	59 (67.0)	17 (85.0)	76
いつも体験できないことができた	66 (75.0)	15 (75.0)	81
面倒だった	12 (13.6)	1 (5.0)	13
一人の方が楽だった	5 (5.7)	1 (5.0)	6
怖い思いをした	5 (5.7)	1 (5.0)	6
汚くて嫌だった	6 (6.8)	1 (5.0)	7

また、回答者全員に、キャンプ体験は自分にとってプラスになると思うかどうかをたずねたところ、8割弱の回答者がプラスになると「強く思う」または「思う」という結果であった(表5、図2)。この結果を実際のキャンプ経験の有無別にみると、男性では、キャンプ体験をしているほうが、プラスになると思う傾向が高かった。女性の場合には、キャンプ体験の有無にかかわらず、プラスになると思う傾向にあった。

表5 「キャンプ体験は自分にとってプラスになると思うか？」への回答結果

	男				女				合計(%)
	学校	自分	なし	計	学校	自分	なし	計	
強く思う	11	15	2	28	7	1	0	8	36 (27.9)
思う	28	15	10	53	9	1	3	13	66 (51.2)
わからない	12	4	3	19	1	0	0	1	20 (15.5)
あまり思わない	2	0	3	3	0	1	1	2	5 (3.9)
思わない	1	0	1	2	0	0	0	0	2 (1.6)
合計	54	34	19	105	17	3	4	24	129 (100)

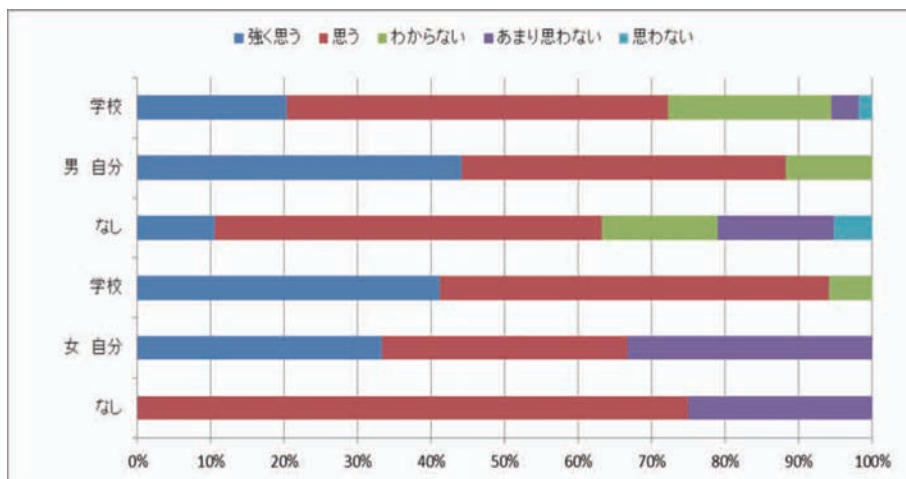


図2 「キャンプ体験は自分にとってプラスになると思うか？」への回答結果

さらに、大学の授業として「キャンプ実習」のような科目があった方がよいかをたずねたところ、4割強の回答者が「どちらでもよい」という回答であったが、「無くてもよい」「必要ない」という否定的な意見の割合は、1割強にとどまった(表6、図3)。男女とも自分たちでキャンプ体験をしたことがある場合には、「あるべきだ」と答える割合が高い傾向にあった。

表 6「大学の授業として「キャンプ実習」のような科目があった方がよいか？」への回答結果

	男				女				合計(%)
	学校	自分	なし	計	学校	自分	なし	計	
あるべきだ	9	7	1	17	3	1	0	4	21 (16.3)
あった方がよい	14	9	4	27	8	0	1	9	36 (27.9)
どちらでもよい	25	15	8	48	4	1	2	7	55 (42.6)
無くても良い	5	3	3	11	1	0	1	2	13 (10.1)
必要ない	1	0	1	2	1	1	0	2	4 (3.1)
	54	34	17	105	17	3	4	24	129 (100)

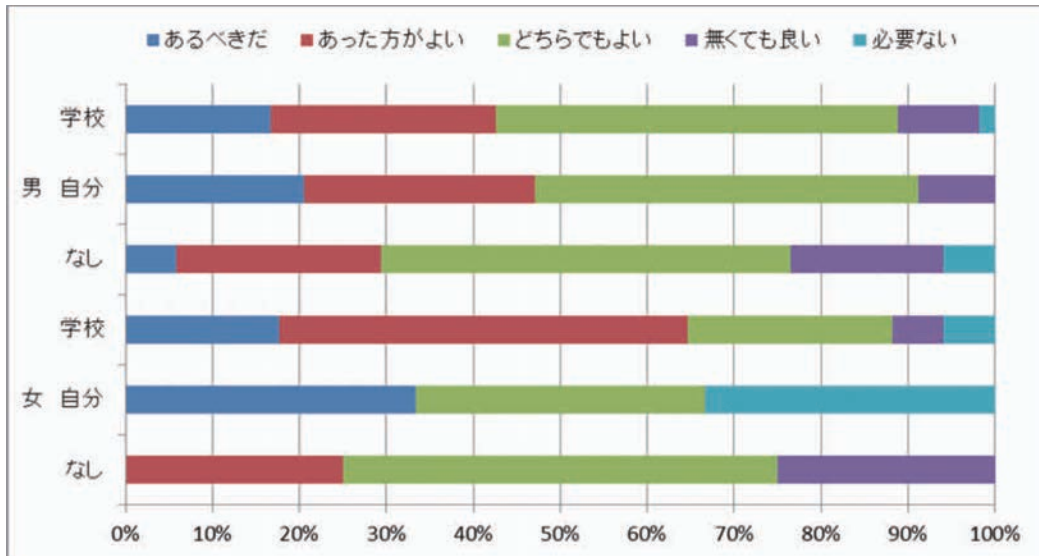


図 3「大学の授業として「キャンプ実習」のような科目があった方がよいか？」への回答結果

これらの調査結果から、キャンプ体験は、日常ではなかなかできない体験を大学生に提供し、彼らの体験活動を豊かにしていること、そのことを大学生も肯定的に受け止め、自分にプラスであると感じ、そのような体験の機会が様々な形で提供されることを歓迎していること、の2点が推測できる。

②キャンプ経験の有無とそのほかの自然体験や日ごろの活動との関わり

調査では、キャンプ体験以外の自然体験の有無もたずね、キャンプ経験の有無との関わりもクロス集計から分析を試みた(表 7、図 4、図 5)。その結果、回答者の 8 割以上が「川や海で泳いだ」「屋外でバーベキューをした」「川遊びをした」という自然体験をしていた。一方で「サーフィンをした」「山菜やキノコを採集した」「火おこしをした」という自然体験をした者は 5 割以下であった。キャンプ体験の有無別にそのほかの自然体験の有無をみると、男性の場合には、多くの項目でキャンプ体験をしている方がそのほかの体験をする場合が多い傾向にあった。

表 7 これまで経験したことのある自然体験

	男				女				合計
	学校(54)	自分(34)	なし(17)	計	学校(17)	自分(3)	なし(4)	計	
川や海で泳いだ	47 (87.0)	32 (94.1)	14 (82.4)	93 (88.6)	14 (82.4)	3 (100.0)	4 (100.0)	21 (87.5)	114 (88.4)
屋外でバーベキューをした	41 (75.9)	30 (88.2)	15 (88.2)	86 (81.9)	16 (94.1)	2 (66.7)	4 (100.0)	22 (91.7)	108 (83.7)
虫取りをした	37 (68.5)	24 (70.6)	13 (76.5)	74 (70.5)	11 (64.7)	2 (66.7)	3 (75.0)	16 (66.7)	90 (69.8)
釣りをした	44 (81.5)	27 (79.4)	11 (64.7)	82 (78.1)	8 (47.1)	2 (66.7)	3 (75.0)	13 (54.2)	95 (73.6)
木登りをした	35 (64.8)	21 (61.8)	8 (47.1)	64 (61.0)	7 (41.2)	2 (66.7)	2 (50.0)	11 (45.8)	75 (58.1)
テントを張って寝た	30 (55.6)	26 (76.5)	1 (5.9)	57 (54.3)	11 (64.7)	3 (100.0)	2 (50.0)	16 (66.7)	73 (56.6)
登山をした	32 (59.3)	16 (47.1)	7 (41.2)	55 (52.4)	10 (58.8)	2 (66.7)	3 (75.0)	15 (62.5)	70 (54.3)
サイクリングをした	29 (53.7)	18 (52.9)	8 (47.1)	55 (52.4)	6 (35.3)	1 (33.3)	3 (75.0)	10 (41.7)	65 (50.4)
サーフィンをした	3 (5.6)	2 (5.9)	0 (0.0)	5 (4.8)	1 (5.9)	1 (33.3)	0 (0.0)	2 (8.3)	7 (5.4)
川遊びをした	42 (77.8)	29 (85.3)	13 (76.5)	84 (80.0)	14 (82.4)	3 (100.0)	4 (100.0)	21 (87.5)	105 (81.4)
山菜やキノコを採集した	11 (20.4)	8 (23.5)	5 (29.4)	24 (22.9)	3 (17.6)	2 (66.7)	1 (25.0)	6 (25.0)	30 (23.3)
飯合でご飯を炊いた	37 (68.5)	22 (64.7)	7 (41.2)	66 (62.9)	15 (88.2)	2 (66.7)	2 (50.0)	19 (79.2)	85 (65.9)
火おこしをした	25 (46.3)	18 (52.9)	5 (29.4)	48 (45.7)	6 (35.3)	3 (100.0)	1 (25.0)	10 (41.7)	58 (45.0)

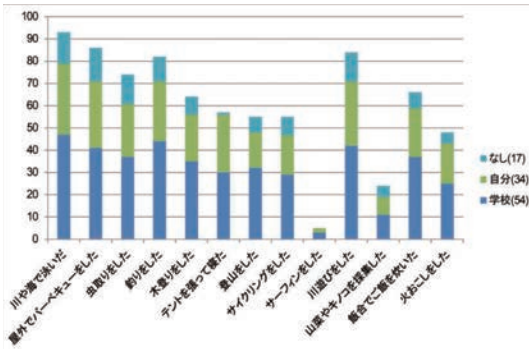


図 4 経験したことのある自然体験(男子)

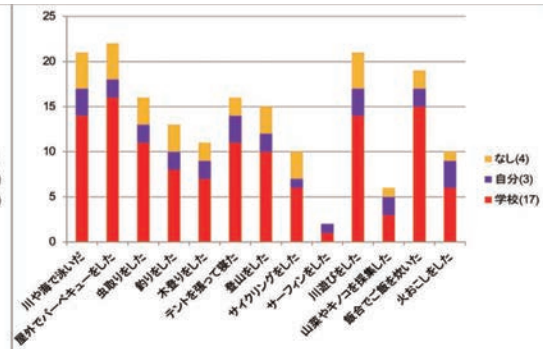


図 5 経験したことのある自然体験(女子)

また、日頃よく行う活動についてもたずね、これもキャンプ体験の有無との関わりについて分析を試みた(表 8、図 6)。日頃、よく行われている(週 3 回以上)活動は、「ネットを使う」「音楽を聴く」「テレビを見る」といった活動であった。キャンプ体験の有無によって活動の頻度に有意に差($p<0.05$)が出た活動としては、男女ともに「包丁を使って料理をする」であった。すなわち、キャンプ体験があった方が、日頃から包丁を使って料理する傾向にあるという結果が得られた。男性の場合には、このほかに「スポーツをする」($p<0.05$)「スポーツ観戦をする」($p<0.01$)「歌を歌う」($p<0.01$)といった活動については、キャンプ体験がある場合の方がよく行われる傾向にあった。

表 8 日頃よく行う活動とキャンプ体験の有無

頻 度	男 子										女 子									
	ほぼ毎日		週 3 回以上		週 1 回程度		たまにする		ほとんどしない		ほぼ毎日		週 3 回以上		週 1 回程度		たまにする		ほとんどしない	
	ある	なし	ある	なし	ある	なし	ある	なし	ある	なし	ある	なし	ある	なし	ある	なし	ある	なし	ある	なし
設 問	キャンプ経験																			
包丁を使って料理をする	4	1	10	0	10	1	26	5	37	10	4	0	4	0	1	1	7	2	4	1
ゲーム(DSやPSP等)をする	30	4	20	4	10	3	15	4	12	2	4	1	2	0	1	1	5	0	8	2
ネットを使う	64	14	18	2	2	1	2	0	1	0	15	2	2	0	0	1	2	1	1	0
スポーツをする	11	1	14	2	27	3	22	6	13	5	2	0	1	0	6	2	5	2	6	0
音楽を聴く	56	9	23	5	4	2	3	1	1	0	17	4	0	0	2	0	1	0	0	0
楽器を演奏する	3	0	3	0	3	2	10	1	68	14	0	0	1	0	2	0	4	1	13	3
将棋やオセロ等のボードゲーム	5	0	0	0	5	2	29	3	48	12	0	0	0	0	0	0	4	2	16	2
テレビを見る	46	8	19	3	5	0	10	2	7	4	13	3	6	0	1	0	0	1	0	0
掃除をする	4	0	8	5	39	4	28	3	8	5	1	0	4	1	6	2	6	1	3	0
洗濯をする	10	1	10	4	11	1	18	1	38	10	1	0	4	2	3	0	4	1	8	1
スポーツ観戦をする	5	0	9	1	24	2	22	5	27	9	0	0	0	0	0	2	12	1	8	1
歌を歌う	13	0	19	2	15	1	25	9	15	5	4	0	3	1	5	2	7	1	1	0

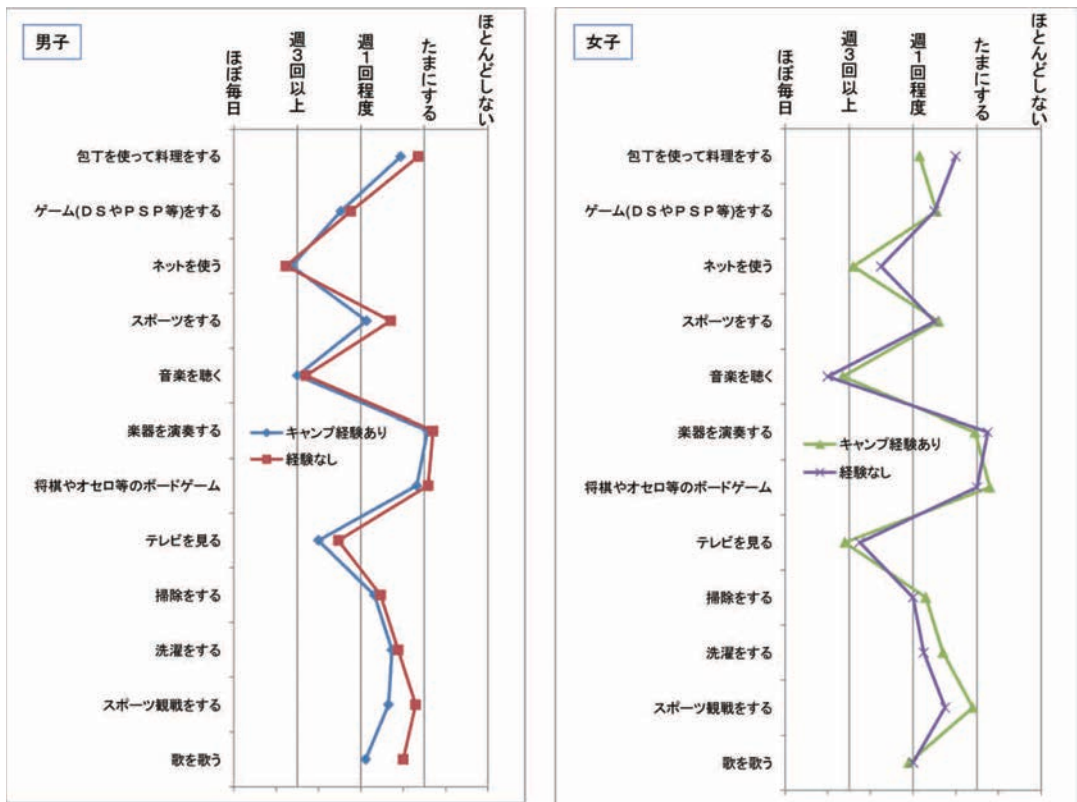


図6 日頃よく行う活動とキャンプ体験の有無

これらの分析からは、体験活動を1つでも行えば(ここではキャンプ体験)、他の体験活動も行いうことが多く、さらに体験活動の幅が広がっていくことが予測できる。大学生に対して、最低一つは半ば強制的であっても何らかの体験ができるような環境を提供し、体験活動の幅が広がるきっかけを作ることが重要と思われる。

4. 本学部の取り組みの現状と課題

本学部では1998年(平成10年)の国際情報学部発足時、教養科目「スポーツ・芸術科目」の中に自然体験活動の一環として、シーズンスポーツの集中講義を設定した。国際情報学部は静岡学園短期大学が前身であるため、体育施設が充実しているとは言い難い。グラウンドはサッカーコート半面以下の規模であり、この施設で学生の満足度を満たすことは難しい。開学当初、通常授業では近隣の公共施設や企業の施設を借用し、バスで移動していた。さらに体育館もバスケットコート2面を確保することが出来ない。したがって、学生がのびのびとスポーツ活動に親しむことが出来るようにと、外に活動場所を求めたことが最大の理由である。その結果、夏期シーズンにはキャンプ実習を、冬期シーズンにはスキー・スノーボード実習を取り入れることとなった。その後、これらシーズンスポーツは学生の支持を受けて、14年にわたり現在まで毎年継続的に実施している。

夏期キャンプ実習の概要は以下の通りである。

(1) 目的

自然体験活動を通して、知的・身体的・社会的・情緒的成長、すなわち全人的な成長を促すことを目的としている。具体的には以下にあげる4点に集約される。

- ① 自然に対する興味・関心を深める
- ② 自然と人間の望ましいあり方を理解する
- ③ 自然体験活動の楽しさや技術を習得する
- ④ 自主性・協調性・社会性・想像力・忍耐力を育成する

(2) 日程

8月末から9月初旬にかけて2泊3日

事前指導・事後レポートを含め、すべて受講した学生にアウトドアスポーツ科目として1単位を付与している。

(3) 場所

静岡県富士宮市 朝霧高原野外活動センター

(4) 期待される効果

自然体験活動を通して、以下の7項目が期待される。

- ① 感性や知的好奇心を育む
- ② 自然への理解を深める
- ③ 物を大切に作る心を育てる
- ④ 生き抜くための力を育てる
- ⑤ 自主性や協調性、社会性を育てる
- ⑥ 自らの平素の生活を客観的に顧みる
- ⑦ 心身をリフレッシュし、健康・体力を維持増進する

(5) 受講生の推移

14年間にわたるキャンプ実習参加者の推移を表9に示した。

表9. キャンプ実習参加者の推移(人)

平成	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
男	34	16	11	8	11	19	15	8	12	16	10	10	12	13
女	13	8	0	5	5	6	9	3	8	6	7	3	8	1
計	47	24	11	13	16	25	24	11	20	22	17	13	20	14

開学時の平成10年度を除けば、毎年20名前後を推移していることがわかる。また、男女比は約7:3で男子学生が多い。女子が多い年は平成18年度、22年度の40%、少ない年は平成12年度の0人、23年度の1人である。

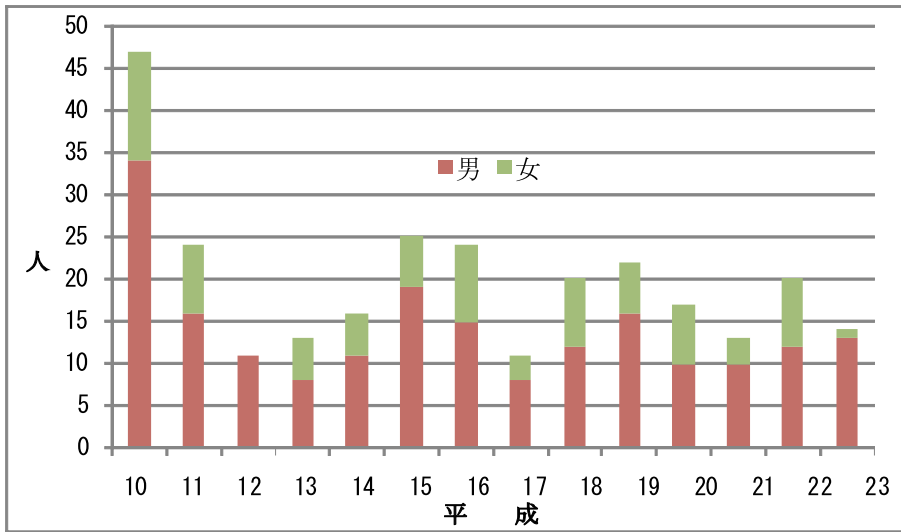


図7 キャンプ実習参加者の推移

(6) プログラム

平成 23 年度のプログラムは以下の通りである。

(1 日目)

キャンプ場集合 (14:00)、キャンプ場ガイダンス、夕食

(2 日目)

朝食、サイクリング&課題解決ウォークラリー (グループ単位、途中で昼食)、夕食

(3 日目)

朝食、後片づけ、静思、昼食、キャンプ場解散 (13:00)

野外での基本的な生活に親しむことを目的としているので、その基本的な活動のひとつである野外炊事をできるだけ多く取り入れている。そのほか、キャンプ場の外に出かける活動もあるが、これまで経験してきたキャンプよりもゆったりと自然を感じられるプログラムとしている。

・野外炊事

キャンプ場に設置されているかまど・水場で炊事を行う。かまどでは薪による裸火で調理する。グループにわかれて炊事をする。

・サイクリング&課題解決ウォークラリー

マウンテンバイクに乗ってキャンプ場の外に出かけ、ゲーム形式の課題に取り組みながらグループ単位のウォークラリーを行う (行程は 10 km 程度)。特別な知識・技術は必要としないが、携行品で示したセパレートタイプの雨具 (上下分かれているタイプ)・リュックサック (両肩で背負えるものであること。手提げ鞆やショルダーバッグは不可) が必要。小雨決行とするが、荒天の場合はキャンプ場でクラフト活動に変更する。なお、身体的な事情で自転車に乗ることができない学生は、事前に申し出るとこ。

・静思

後片づけが終わったあと、ひとりになって、それぞれ静かにキャンプについてふりかえる活動。

(7) 評価

実習終了後の学生へのアンケート調査により、キャンプ実習の自己評価をする。過去の調査を集計し、以下に示す。

① 平成 14 年・15 年の「自己評価」結果

受講生に、最後の「静思」の時間に以下の 5 項目について 3 段階評価で「自己評価」を実施した。

- ア. 実習したことが出来るようになったか
- イ. 実習しながら自分の得意なところや不得意なところがわかったか
- ウ. 実習したことを他人に話すことが出来るか
- エ. 実習しているうちに、さらに研究したり、工夫したりすることができたか
- オ. 今回の実習に充実感があったか

それぞれ 3 段階評価で、「良くできた」が 2 点、「少しは出来た」が 1 点、「出来なかった」が 0 点として、10 点満点で自己評価し、表 10 に示した。

表 10 平成 14 年度の自己評価

性	n	ア	イ	ウ	エ	オ	合計
男子	11	1.36 ± 0.50	1.55 ± 0.52	1.64 ± 0.67	1.45 ± 0.52	1.55 ± 0.52	7.55 ± 1.44
女子	5	1.80 ± 0.45	1.80 ± 0.45	2.00 ± 0.00	2.00 ± 0.00	2.00 ± 0.00	9.60 ± 0.55
合計	16	1.50 ± 0.52	1.63 ± 0.50	1.75 ± 0.58	1.63 ± 0.50	1.69 ± 0.48	8.19 ± 1.56

平成 14 年は男子 11 名の平均が 7.55 で、ほぼ満足できたことがうかがえる。特に「オ. 今回の実習に充実感があったか」については 6 名が「良くできた」と自己評価している。

「イ. 実習しながら自分の得意なところや不得意なところがわかったか」については、「ウ」に次ぐ高得点であり、「生きる力を育む」機会としてこのキャンプ実習が意味のある活動であったことが推測される。女子については 5 名中 4 名が 10 点満点である。

表 11 平成 15 年度の自己評価

性	n	ア	イ	ウ	エ	オ	合計
男子	19	1.61 ± 0.50	1.67 ± 0.49	1.72 ± 0.46	1.44 ± 0.62	1.56 ± 0.51	8.00 ± 1.78
女子	6	1.86 ± 0.38	1.71 ± 0.49	1.86 ± 0.38	1.71 ± 0.49	1.71 ± 0.49	8.86 ± 1.07
合計	16	1.68 ± 0.48	1.68 ± 0.48	1.76 ± 0.44	1.52 ± 0.59	1.60 ± 0.50	8.24 ± 1.64

平成 15 年の学生は「エ. 実習しているうちに、さらに研究したり、工夫したりすることができたか」について、19 名中 15 名が「良くできた」と自己評価している。期待される効果のうち、「①感性や知的好奇心を育む」ことや「④生き抜くための力を育てる」ことなどが関連している。

② 平成 16 年の「自己評価」結果

平成 16 年は、以下のような 3 項目について 3 段階で「自己評価」した。

- ア. キャンプの不便さに慣れたか
- イ. 快適なキャンプになるような工夫をしたか
- ウ. 他のキャンパーと協力したか

表 12 平成 16 年度の自己評価

性	n	ア	イ	ウ	合計
男子	15	1.47 ± 0.64	1.53 ± 0.52	1.67 ± 0.49	4.67 ± 1.18
女子	9	1.67 ± 0.50	1.44 ± 0.53	1.67 ± 0.50	4.78 ± 0.67
合計	24	1.54 ± 0.59	1.50 ± 0.51	1.67 ± 0.48	4.71 ± 1.00

「ア．キャンプの不便さに慣れたか」については男子よりも女子が高得点であった。これは女子の方が環境への適応力や忍耐強さが高いことがわかる。しかし、「イ．快適なキャンプになるような工夫をしたか」については、若干であるが男子が高く、環境を変えていこうとする工夫が見受けられた。「④生き抜くための力を育てる」にはとても重要な要素であると考ええる。

③ 平成 20 年・21 年の「自己評価」結果

平成 20 年度・21 年度の学生には次の 3 項目を 3 段階で「自己評価」した

- ア． 自然に親しむことが出来たか
- イ． つらいことや難しいことに頑張って取り組むことができたか
- ウ． 他のキャンパーと協力することができたか

表 13 平成 20 年度の自己評価

性	n	ア	イ	ウ	合計
男子	10	2.00 ± 0.00	1.80 ± 0.42	1.90 ± 0.32	5.70 ± 0.67
女子	7	1.86 ± 0.38	2.00 ± 0.00	1.86 ± 0.38	5.71 ± 0.49
合計	17	1.94 ± 0.24	1.88 ± 0.33	1.88 ± 0.33	5.71 ± 0.59

表 14 平成 21 年度の自己評価

性	n	ア	イ	ウ	合計
男子	10	1.80 ± 0.42	1.80 ± 0.42	1.80 ± 0.42	5.40 ± 1.07
女子	3	2.00 ± 0.00	2.00 ± 0.00	2.00 ± 0.00	6.00 ± 0.00
合計	13	1.85 ± 0.38	1.85 ± 0.38	1.85 ± 0.38	5.54 ± 0.97

平成 20 年と 21 年は、参加者数が比較的少なかったせい、すべての項目で高得点を示した。特に「ウ．他のキャンパーと協力することができたか」について、他者との関わりをあまり好まない傾向が多い中、高得点であったことは以外であった。

この 3 項目の質問は「自然」「他存在」「自己」という野外活動の 3 視点からみた、

- ① 環境に対する行動と理解
- ② 社会的人間関係
- ③ 自己成長

といった社会生活の中においても最も重要と思われる項目であり、これらが高得点であったことは非常に興味深い結果となった。

このように野外活動は「自然や環境への調和」を通して、「対人との建設的なコミュニケーション」、自己発見・自己創造・自己実現といった「自己成長」を促す取り組みである。そして、本学部の学生にとって、身体活動が「楽しい」、「心地よい」、「癒される」、「元気

になる」、「やる気が出る」、という「肯定的な感情」が素直に具現化される良い機会であり、何よりも「自信がつく」という「成功体験」が、今後の学生の社会的スキルアップに大きく貢献することが期待される。

次年度以降、より多くの学生にこの「成功体験」を経験させるために、参加者増員のための工夫をこらすこと、そして多くの学生が参加することにより、さらなるきめ細かなキャンププログラム開発が今後の大きな課題であろう。

5. おわりに

本研究では、人間形成における体験活動の意義を明らかにし、大学生においても体験活動が意義あるものであることを明らかにした。

近年の全国的な調査研究から、これまで経験的に言われてきた体験活動のよさが実証され、特に道徳的・精神的な成長を促すためには、体験活動が有意義であることが明らかとなった。このような成長は、社会人となる大学生にも「社会人基礎力」等の呼び方で期待されるものであり、大学教育においても体験活動が重要かつ必要である根拠と考えられる。また、教員を養成する教職課程教育においても、将来高い生徒指導力や実践的指導力を備えた教員になるために、学生時代にはその基礎となる体験活動をより多く行うことが望ましいと考えられた。

次に、本学の学生の現状やこれまでのキャンプ実習という形での体験活動の提供をみると、学生が、体験活動を自分にとってプラスの活動であるにとらえ、自身の成長を実感していること、特に自然体験活動は体験活動の幅を広げるのものであると、体験活動やキャンプ実習のようなプログラムを肯定的に受け止めていることが明らかとなった。

したがって、本学部において、今後も、大学生の日頃の活動の中で不足しがちな自然体験、野外活動の提供を重視し、キャンプ実習のような活動の充実を図ることは重要であると考えられる。

注

- 1) 詳しくは、国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書〔概要〕-子どもたちの体験は、その後の人生に影響する」（平成 22 年 10 月）等を参照。
- 2) 日本教育新聞「体験活動推進法を制定へ」（平成 23 年 6 月 13 日号、第 1 面）
- 3) 文部科学省・国立教育政策研究所生徒指導研究センター「キャリア教育のさらなる充実のためにー期待される教育委員会の役割ー」（平成 23 年 2 月）4～5 頁
- 4) 学情「社会人基礎力BOOK」（平成 23 年 6 月）5～6 頁
- 5) 教育新聞「『教師力』を探る」（平成 23 年 7 月 4 日号、第 1・2 面）

参考文献

- ・高等学校学習指導要領
- ・中学校学習指導要領
- ・(財)全日本社会教育連合会「社会教育」782 号、平成 23 年 8 月号
- ・自然体験活動研究会（編）、野外活動の理論と実践、杏林書院、2011

- ・日本野外教育研究会（編）、キャンププログラム 1、杏林書院、1992
- ・日本野外教育研究会（編）、キャンププログラム 1、杏林書院、1993
- ・日本野外教育研究会（編）、キャンプテキスト、杏林書院、1994
- ・日本野外教育研究会（編）、野外活動テキスト、杏林書院、1995
- ・井村仁、我が国で初めて用いられた「野外教員」の意味と歴史的背景、野外教育研究、pp99-111、2006
- ・井村仁、我が国における野外教育の源流を探る、野外教育研究、pp85-97、2006

資料

大学生の体験活動に関するアンケート

このアンケートは、「大学生の体験活動に関する現状と課題」を明らかにする研究の基礎資料となるものです。回答が個人を特定して外部に漏れたり、他の目的に使用したりすることはありませんので、安心してありのままを回答してください。

Q 1. 今までにキャンプのような自然体験をしたことがありますか(あてはまる番号に○1つ)。

1. 学校で体験した 2. 自分たちで体験した 3. 体験したことはない (Q 2 へ)

S Q. 体験して、どんな事を感じましたか(あてはまる番号に○はいくつでも)。

1. 友だちができた 2. リーダーシップをとれた 3. 協力してできた 4. 自然を満喫できた
5. いつも体験できないことができた 6. 面倒だった 7. 一人の方が楽だった
8. 怖い思いをした 9. 汚くて嫌だった 10. その他()

Q 2. あなたはこれまでに以下のような体験をしたことがありますか(あてはまる番号に○はいくつでも)。

1. 川や海で泳いだ 2. 屋外でバーベキューをした 3. 虫取りをした
4. 釣りをした 5. 木登りをした 6. テントを張って寝た 7. 登山をした
8. サイクリングをした 9. サーフィン(波乗り)をした 10. 川遊びをした
11. 山菜やキノコを採集した 12. 飯合でご飯を炊いた 13. 火おこしをした

Q 3. あなたは日頃の生活の中で以下のような活動をよく行うほうですか。以下の5段階で答えてください。

(答える時には、問の右のあてはまる番号 1 つに○をつけてください。)

< 1. ほぼ毎日 2. 週3回以上 3. 週1回程度 4. たまにする 5. ほとんどしない >

- | | |
|---------------------|---------------------------|
| 01. 包丁を使って料理をする | 1 . . 2 . . 3 . . 4 . . 5 |
| 02. ゲーム(DSやPSP等)をする | 1 . . 2 . . 3 . . 4 . . 5 |
| 03. ネットを使う | 1 . . 2 . . 3 . . 4 . . 5 |
| 04. スポーツをする | 1 . . 2 . . 3 . . 4 . . 5 |

